

具体的な方法として、全面的な保護は無理としても水域の一部を目の細かいネットによってかこいこみ、コカナダモを排除し、在末植物群落の回復を計ることが考えられる。

参考文献

1. Kunii, H. (1982) The Critical Water Temperature for the Active Growth of *Elodea nuttallii* (Planch) St. John. 日生態誌 32,111-112.
2. 星 一彰 (1982) 尾瀬沼にコカナダモ侵入、水草研究会報 No 7、1.
3. 星 一彰 (1983) 尾瀬沼のコカナダモ分布拡大、水草研究会報No14、6.
4. 角野康郎 (1981) 深泥池の水質と水生植物、深泥池学術調査報告書、46-54.
5. 国井秀伸 (1982) コカナダモの生活環 水草研究会報 No 8、3-5.
6. 栗田秀男・他 (1974) 特別天然記念物尾瀬文化財調査報告書、43-52.
7. 栗田秀男・他 (1977) 尾瀬沼の湖沼学的研究 第3報. 水質および生物群集. その3 水生植物の消長 群馬生物 Vol.26、9-12.
8. 土谷岳令・他 (1984) 種々の実験条件下におけるコカナダモとオオカナダモの成長のちがい. 琵琶湖研究所委託研究、1-12.
9. Kadono, Y. (1982) Occurrence of Aquatic Macrophytes in Relation to pH, Alkalinity, Ca^{++} , Cl^{-} and Conductivity. 日生態誌 32、39-44.
10. 吉成仁志・船越真樹 (1983) 木崎湖におけるコカナダモの侵入と在来種に対する影響. 陸水学会予稿集.
11. 吉村信吉 (1939) 湖沼学. pp.340-341、三省堂.

○Donald N. Riemer "Introduction to Freshwater Vegetation" (AVI Publishing Company, 1984年、pp. 207、約11,000円)

タイトルに "Vegetation" とあるが、植生や水草群落を主題にしたものではない。水生植物がさまざまな分野で関心を呼びつつある状況を背景に、これから水生植物について学ぼうとしている読者を対象にした入門的なテキストである。中味の割に値段が高いという気はするが、重要な点が簡潔にまとめてあるので、役に立つ本である。しかし、手短かに知識を解説しようとする余り、引用される例と結論が短絡的すぎると感じられる箇所がないでもない。例えば、沈水植物の光合成と光条件の問題 (32-33p.) で、ある測定例をあげて20,000ルクス以上では強光阻害がみられるのがふつうであるように結論づけている点などである。この例など、光以外の要因 (例えばpHの上昇) の関与を考えてみるのが現在ではふつうだと思うのだが。

内容は3部構成になっている。第1部では水生植物の生態とかかわりのある水界の環境条件が扱われる。第2部は、水生植物のもつ特性や代表的な水草群についての解説となっている。第3部は、もっとも多くのページがさかれている部分で、水生植物と人間とのかかわりが論じられる。水生雑草の異常繁茂によってもたらされる影

響にふれたあと、現在利用できる防除法を解説し、最後に、水草の利用の可能性を論じている。(角野康郎)

山田 洋著「アクアリウム プランツ フォー アクアерт 水草図鑑」(発行 ハロウ出版社、発売 星雲社、1985年4月、136頁、1980円)

アクアリウムで栽培される水草216種を写真とかんたんな解説で紹介したもの。この種の本でしばしば目に余る学名のあてちがいはほとんどなく (私が気付いたのは、196. ナヤスだけである。もっとも外国産の水草については現物を知らないのでも何とも言えない)、はっきりしないものは "学名不詳" としてある。これは良心的な取り扱いと好感がもてるのだが、正体不明の植物が次々と持ち込まれ、正確な同定もなされないままに適当な名前がついて出回ることに不安を感じないでもない。

末尾に、1.水草の育て方、2.水草の進化、等、筆者の考えがまとめられている。ここで述べられる進化論は、現在の植物学の知見とは無縁な (分類学を無視した!) 「著者独自の進化論」である。興味深い着想もみられるし、そう目くじらを立てることはないのかもしれない。(角野康郎)